

第5学年3組社会科学習指導案

日 時 10月30日(火)6限

指導者 大塚 悠矢

場 所 5-3教室

1 単 元 これからの食料生産とわたしたち ～フード・アクション・5年3組～

2 単元目標

- (1) 我が国の食料自給率低下という問題について、写真や統計、文書資料などを通して、課題や取り組みを読み取ったり、整理できたりできる。
(知識及び技能)
- (2) 我が国の食料自給率上昇への取り組みと課題について、多様な考えを比較・総合・関連付けながら事象を多面的に捉え、自分と社会とのかかわりについて表現することができる。
(思考力・判断力・表現力等)
- (3) 我が国の食料生産の現状と未来に関心をもち、他者とかかわり合いながら学習課題を追究し、学んだことを自分のこれからの生活に生かそうとすることができる。
(学びに向かう姿勢・人間性等)

3 単元構想

本学級には、「今日のニュース」と称して教師が紹介する新聞記事に対して、「知っているよ」とその内容を説明したり、「他にもあるよ」とニュースを発表したりするなど、社会科に興味をもっている児童がいる。単元「国土の気候と特色」では、「もし住むなら暖かい地方か寒い地方か」という単元の課題を設定して、調べ学習を行い、単元の終末の授業で意見交流を行った。その際、児童は、「気候」や「住まい」などの視点から各々の考えを発表した。しかし、「一年を通して暖かい沖縄がいいです。」や「北海道の家は二重窓にして寒さを防いでいます。」など、その考えは一面的な捉えのみで止まっていたり、単元を通して扱った「農業」や「観光」に関する内容が少なかったりと、発言内容に偏りがあつたりした。また、「沖縄と北海道を比べると〇〇」や「〇〇な気候を生かして…」など、学んだことを比較・総合・関連付けながら、事象を多面的に捉えたり、自分たちの生活とのかかわりまで考えたりできる児童は少なかった。そのため、本単元を通して事象を複数の視点から多面的に捉え、多様な考えを比較・総合・関連付けながら、主体的に社会とのかかわり方について考えられる力を育みたいと感じた。

本単元は、日本の食料自給率の低さに加え、食品ロスの問題から、日本の食料生産の抱える問題について考えていく。給食の残飯も食品ロスに含まれることなどから、食料生産の抱える問題点を児童一人一人が自分のこととして捉えることができるようになっていく。また、食料自給率の低下という問題は多様な捉え方が内包されている。本単元でも、その要因として、食生活の変化や農業従事者・耕地面積の減少という課題がある一方、自給率上昇のため、トレーサビリティなど食の安全性の確保や地産地消の広がり、環境保全への取り組みなどが行われていることを、資料を基に捉える構成となっている。この構成により、児童は食料生産に対する多様な考えを比較・総合・関連付けながら、事象を多面的に捉えることができる。そして、「フード・アクション・ニッポン」の活動を参考に、自分たちの生活とのかかわりについて考え、学びをこれからの生活に生かそうとすることができる内容となっている。

指導に当たっては、前単元までに学習した「農業」や「水産業」の流れを受け、多くの人が私たちの食生活を支えている一方、私たちの食生活は輸入に頼っている一面もあったことの想起から始める。そこに、食料自給率のグラフの数値や食品ロスの写真から「日本の食料生産は大丈夫だろうか」という疑問を感じるようにする。児童が食料生産について疑問を感じたところで、「フード・アクション・ニッポン」という取り組みを紹介し、日本では、7年後までに食料自給率45%を目指していることを紹介する。その後、調べ学習や児童同士のかかわり合いを経ながら、各々が「できる」「心配」の立場から、毎時間本時の振り返りと共に、自らの主張をまとめ、最終的な主張へと考えを練り上げていく。学習を進める際には、「個」「班」「全体」と異なる学習形態をとることで児童が多様な考え方に触れられるようにする。また、「できる」「心配」と価値判断を迫りながら学習を進めることで、児童は、自らの主張をよりよいものにするために、事象を複数の視点から多面的に捉えるようとするだろう。調べ学習を行う際は、「地産地消」「食の安全」「食生活の変化」「食料生産人口」と視点を定め行う。その際、「資料から分かったこと」「自分の考え」「友達の考え」と枠を分けたワークシートを活用し、多様な考えを比較・総合・関連付けながら自らの考えを練り上げることができるようになりたい。そして、単元の終末では、調べたことと主張の整理をした後、本単元で学んだことを生かして、「本当に7年後に食料自給率は45%に達するのだろうか」という問題への意見交流を行う。発表を通して出た課題をもとに、「自分たちにできることは何だろう」というテーマで話し合いを行い、学んだことを自分たちのこれからの生活に生かすことができるようにする。最後に、「フード・アクション・5年3組」と称して、児童一人一人が自分たちにできることを考え、それを伝えるまとめのミニ新聞を作成したい。

4 指導計画（6時間完了）

- ・大丈夫か、日本の食料生産……………1時間
- ・7年後、食料自給率は45%に達するのかわかるか調べてみよう……………2時間
- ・本当に7年後に食料自給率は45%に達するのだろうか……………2/2時間（本時）
- ・フード・アクション・5年3組 ～自分たちにできることを伝えよう～……………1時間

5 本時の指導

(1) 目標

「7年後に食料自給率は45%に達するのだろうか」という問題への意見交流を通して、他者とかわり合いながら自給率上昇のために自分たちにできることを話し合い、考えまとめることができる。
(思考力・判断力・表現力等)

(2) 準備

教師：本単元での使用資料

(3) 展開

	授業展開	指導上の留意点
か か わ り 合 う Ⅰ (確 か め る)	<p style="text-align: center;">本当に7年後に食料自給率は4.5%に達するのだろうか</p> <p>1 自分の立場と考えを発表する。</p> <p><できる></p> <ul style="list-style-type: none"> ○地産地消の取り組みが広がっているよ。 ○地元の食材は新鮮で美味しいよ。 ○国産品の方が安全だと思うな。 <p><心配></p> <ul style="list-style-type: none"> ○安い輸入品に頼ってしまう。 ○農家の数や耕地面積が減っているよ。 ○安い輸入品が増え、農家をやりたがらない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までにまとめた考えを発表し、問題への取り組みと課題を確認する。 ・児童の発言を、「できる」派の視点として、「地産地消」「食の安全」「心配」派の視点として「値段・食生活の変化」「食料生産人口」に分けて板書し、本単元で使用した資料を掲示することで、問題を多面的に捉えていることを視覚化し、本時を通して多様な考えを比較・総合・関連付けることができるようにする。 ・「…なら僕にもできそう。」など、問題を自分の事と捉えた発言から、目標達成への方法を問いかける。 ・自分の事と捉える発言が乏しい場合は、「自分にできそうなことはありますか。」と問題を自分の事と捉えるよう思考を促す。
	<p style="text-align: center;">食料自給率を上げるために自分たちにできることは何だろうか</p> <p>2 今後、自分たちにできることはないか考え、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○残飯を減らし、食べ物を大切に使う。 ○国産品を買うようにする。 	
か か わ り 合 う Ⅱ (深 め る)	<p>3 「班」→「個」→「全体」と段階的に意見をかわらせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○給食の残飯を減らすために、給食の準備を早くして食べる時間を増やす。 ○給食の残飯をなくそうと他のクラスに呼びかける。 ○家や学校で好き嫌いをせず、残さず食べる。 ○買い物に行ったら、なるべく旬の食材を選んで買うように勧める。 ○将来は、国産品を買うようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「班」「個」「全体」と、異なる学習形態をとることで、全ての児童に発言の機会と、多様な考えに触れる機会を保障する。「班」でかかわった後にもう一度、「個」に戻り、他者の意見を加えたり、他者の意見を踏まえて新たな考えを加えたりすることで、自分の考えを深めることができるようにする。 ・自分の考えを述べる際は、本単元の学習や自分の生活経験などを参考に理由や根拠を述べるよう助言をする。

		<ul style="list-style-type: none"> ・「どのようにするのですか。」「本当にできそうですか。」などと、児童の考えを揺さぶり、考えを具体化させたり、「〇〇さんの考えをどう思いますか。」「どうしてそう考えたのですか。」などと、児童が考えを比較・関連付けできるよう問い返しをしたりする。
<p style="writing-mode: vertical-rl;">まとめる・振り返る</p>	<p>4 本時の学びを振り返り、発表する。</p> <p>☆今日は日本の食料自給率が7年後までに45%まで上がるか考えました。私は最初、〇〇と考えていたけど、□□さんらの意見を聴いて、△△と考えるようになりました。私は、7年で、食料自給率が45%に上がるのは難しいと思うけど、自分でもできることをして、自給率が上がってほしいと思います。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習したこと」「学習した過程」「最終的な感想・考え」と意識的に分けて文章化するよう助言をすることで、児童が総合的に本時の学びを振り返り、学びを自覚できるようにする。 ・児童に振り返りを文章化させたり、発言させたりすることで、教師が児童の学びを確認できるようにする。

(4) 評価

「7年後に食料自給率は45%に達するのだろうか」という問題への意見交流を通して、他者とかかわり合いながら自給率上昇のために自分たちにできることを話し合い、考えまとめることができたか、授業の様子やノートへの記述から判断する。

高 評

【単元の導入】

「農業」「水産業」の学習を通して、児童たちは自分たちの食生活が多くの人に支えられていることを学習した。本単元では、前単元やスーパーなどへの買い物経験から、私たちの食卓に上る食材がどこから来ているのか想起する。

<国内外多く場所から私たちの食卓へ>

- ・お米は山形県の庄内平野が有名だったね。
- ・かつおは静岡県の焼津港でよく獲れていたね。
- ・外国産のものも多くスーパーに並んでいるよ。
- ・スーパーでアメリカ産の牛肉を見たよ。
- ・私たちはどれぐらい外国に頼っているのだろう。

<日本の低い食料自給率>

- ・日本の食料自給率は低いんだね。
- ・昔はもっと高かったのに。
- ・もし輸入が止まったら今までみたいに食事ができないかもしれないよ。
- ・輸入しているのに食品ロスも多いね。

大丈夫か、日本の食料生産 ①

<映像を通して「フード・アクション・ニッポン」の存在を知る>

- ・僕は、この目標を達成できると思うな。
- ・私は、今のままではこの目標が達成できるか心配だわ。

7年後、食料自給率は45%に達するの調べてみよう ②③

<達成できる>

- ・もし輸入先の国で天候不順や災害が起きて輸入できなくなったら大変。
- ・地産地消に取り組んでいる。
- ・地元のものの方が新鮮でおいしい。

- ・トレーサビリティの仕組みなど、安全・安心な食への取り組みが行われている。
- ・食の安全のため、環境保全への取り組みを協力して行っている。

<心配>

- ・外国産のものがあるおかげで、安く年申いろいろなものを食べることができる。
- ・TPP参加により、安い輸入品が増える。

- ・最近では農業や水産業に携わる人が減ってきている。
- ・農家数が減り、耕地面積も減ってきている。

本当に7年後に食料自給率は45%に達するのだろうか(本時) ④⑤

<フード・アクション・ニッポンの振り返り>

- ・日本は7年後に食料自給率45%を目指して様々な取り組みを行っていたね。

<できる>

- ・地産地消の取り組みが広がっているよ。
- ・地元の食材は新鮮で美味しいよ。
- ・国産品の方が安全だと思うな。

<心配>

- ・安い輸入品に頼ってしまう。
- ・農家の数や耕地面積が減っているよ。
- ・安い輸入品が増え、農家をやりたがらない。

自分たちも食品ロスを出しているね。これからの日本のために、自分たちにできることは何かあるかな。

- ・食の問題に関心をもって皆に知らせたいな。
- ・給食や家での残飯をなくしたい。
- ・国産の安全な食品を選びたいな。

フード・アクション・5年3組 ~自分たちにできることを伝えよう~ ⑥

【単元後の児童の姿】

日本の食料自給率低下は大きな問題だと思う。単元を通して様々な意見が出たけど、私も自給率を上げるために残飯を出さないなど、できることをしていきたい。

<教師の支援>

【第1時】

- ・児童が食料自給率の低下という社会問題を自分の事として捉えられるようにする。
- ・「フード・アクション・ニッポン」という取り組みで、7年後に自給率45%を目指していることと、「給食ニュース」から自給率を1%上げるための方法例を紹介し、目標が本当に達成できるのかという疑問を感じるようにする。

【第2・3時】

- ・「できる」派の視点として、「地産地消」「食の安全」、「心配」派の視点として「値段・食生活の変化」「食料生産人口」を定め、資料を基に調べ学習を行う。
- ・個・班・全体と異なる学習形態を取り入れ、多様な考えに触れられるようにする。

【第4・5時】

- ・第5時で話し合うための共通の土台を作るため、第4時で資料から読み取れることと、立場、主張を整理する。多様な意見を比較・総合・関連付けたりし、多面的に事象を捉えられるようワークシートを活用し、それに沿って助言をする。

【第6時】

- ・単元の学びをまとめる新聞を作成し、児童が学びの深まりを実感できるようにする。